

80. Love
TOKYO FM

cover artist
山下達郎

TOKYO FM
Broadcasting Co., Ltd.
Monthly Timetable
OCTOBER 2017

10

Tokyo FM's
Sunday
Songbook
毎週日曜日 14:00-14:55



山下達郎の
サンデー・ソングブック
25TH
ANNIVERSARY

インタビュー・文：結城美葉
写真：稲美潤一郎

山下達郎の

サンデー・ソングブック

25TH ANNIVERSARY

INTERVIEW

TATSURO YAMASHITA

「番組のテーマは『山下達郎の個人コレクション』を扱って発信される、日本最高のアーティストプログラムです。まずは準備に25年間かけてくれた敬意を込めたい。」

「番組が25年続いた理由は、実は僕自身にもわからないです。正直驚愕でなかったような番組です(笑)。オールディーズ番組としては決してビジネス向けてはなくて、僕に中絶者向けと言っているんですけど、そんなに面白くないような音楽は聞いていない。でも、時間限のせい(笑)で入っている曲もなくて、トークが面白いって喜んで下さる方(笑)が多い。そういう部分から僕自身と広げていったのかもしれない。僕自身はこの番組に対して、常に敬意ある態度を持って残ってきました。オールディーズ番組が、最近ではますます少なくなってきた。僕の番組に集約されてきています。以前だったらイージーリスニングのリュクスなんて絶対なかったし、かかなくてもいいけど、今はとしか広い範囲をカバーしからなかったです。」

「そう、サンソンは、連曲をはじめ、放送当日のテーマ、そしてオムニバス曲のリリースプログラムまで、すべて山下達郎本人の手で行っている。オールタイム・マイセルフな番組。日本音楽を構成作業もいなければ、リチャーも存在しない。」

ちなみにリマスタリングというのは、山下氏いわく、「レコーディング事情がよくなかった昔の曲も、現代の曲並みで聴かれないように修正して、70年代に入ると、DJの曲の音圧に比べても、その音が聴きやすいようなデジタル音圧に仕上げること」だ。

「番組がスタートした当初から、ディレクターとアシスタントと音響技師、そして僕、4人だけで制作してきました。プロデューサーもいなくて、主に僕でやっていただけてます(笑)。チームワークが大切だから、大人数はナイスです。少人数だと意思の疎通もしやすいです。僕はラジオから育った人間で、それこそ中学生の頃は朝から晩まで聴いていた。高橋一博、福田一郎、糸原五郎、中村とうよう、そういう方々が担当から教まらなくて。そういう方々が担当するFEN(在日米軍向けラジオ局)を聴くようになったんです。そう、いうディスクジョッキーはみなさん、自分で作曲して、自分の言葉で話していたんです。それから僕もそういうやり方で今までやってきました。」

「中高生時代、中間試験や期末試験のお供に必ずFENの深夜放送を聴いていたという山下氏。机に付き添って楽譜帳を敷き、勉強中でも耳にした曲のタイトルやフレーズを面紙に書き留め、後にレコード屋へ探しに行っていたとい

音楽は、みんな(ラジオ)から教わった

音楽家・山下達郎、唯一のレギュラー番組『山下達郎のサンデー・ソングブック』愛称は『サンソン』。当初は土曜日に『サタデー・ソングブック』としてスタートしたこの番組が、本年2017年10月で25周年を迎える。今回、25周年をきっかけに、TOKYO FMタイムテーブルで山下達郎の独占インタビューを敢行。全国ツアーを終えたばかりの本人に貴重なお時間を頂き、影響を受けたラジオとの出会い、音質へのこだわりそして、これからの『サンソン』について話を伺った。

その当時のラジオの膨大な音楽知識の量が、そっくりそのまま『サンソン』に活かされている。「FMレギュラーというオールディーズ専門の対峙で、当時『FMレギュラー』という番組があったんです。高校生で、それを毎週テープに録って聴いていたんです。ある日、ドックワップの特集をやったんです。あれこそが、僕の音楽を決定付けた、原点となりました。あと、ローランド・バイナム、ドント・トレイサーという当時の黒人ADJがいて、彼らのプログラムからリズム＆ブルースの知識はすべて得ました。そう、結局みんなラジオから教わったんです。ジム・ニューター、ローランド・バイナム、ドント・トレイサーの人は、僕のラジオ生活の先生。『僕もジム・ニューターみたいな音楽番組を聴いていた。そこから思っていましたから。』

「学生時代の山下少年がラジオに夢中になっていたように、『サンソン』にも、このころ10代後半から20代の若いリスナーが増えていきました。『本当に若いリスナーが増えています。しかも送ってくるリクエストもかなりリアクティブ。親子と親世代で聴いている、親御さんからの送り込みもあるかもしれない(笑)。ラジオというメディアはパーソナル・パーソン、基本的に1対1のメディアなんです。テレビなん

かとはもっとマスのメディアだけど、ラジオは昔対峙しているのと同じように会話することができ。『僕がリスナーとして聴いている時もそうだったし、だから、若い世代の声が番組に届くことも嬉しいですね。』

「25年音楽を録り続けている『サンソン』だが、番組の知識のオキネがひとつある。それはメールではなく(ハガキによるリクエスト)しが受け付けない、ということだ。「一度メールも受け付けようとしたんですけど、リスナーから轟然たる非難を浴びまして(笑)。現実的には、スタッフが少ないので、メールによる量が捌けずぎちゃって、僕がリクエストのすべてに目を見送せなっちゃうんですよ。肉声のリクエストっていいんですけど、ハガキを送ってくる方がほとんどなんです。僕も自分スタイルがあって、常連さんはバツと見ただけで、どの人かわかります。毎週送って下さる華マメな方もたくさんいて、『先週はジャコメツィアを観てきました』とかね、逐一教えてくれるんです(笑)。」

「毎週、ハガキにも宛先に目を通してという山下氏だが、選曲やリマスタリングも命め、とにかく時間と手間を惜しまず、番組のクオリティをキープし続けている。それも25年間。「手間かけはかかれます(笑)。前日打ち込みで、一旦仕事ですからね。ちなみに昨日は、

ツアーの千秋楽から帰ってきて、夜8時くらいから番組録でのハガキを読んで、その中からリクエスト曲を抽出して、レコード翻から曲を出して……で、それを放送の時刻に15分ずつやってました。翌日は朝晩に録音して、番組した12曲をリマスタリングしたんです(笑)。」

「……とサラッとしゃべって、後者がツアー中やレコーディング作業に没れる中でも、これらの作業は四半世紀続けられてきたわけだ。しかも、そのあいだ、8回ほど替替番組組まれたとき以外、ご自身の事情ではほとんどかかがない。これはもう驚愕するかな、ラジオ音楽、音楽家にはならない。」

「ははは、でも音楽を聴くために、レコードを

買うために、この販売をやっているようなものですからね。だから番組を長く続けても不思議ななんてことはありません。これからやってみないかと思う気持ちもありません。以前、90年代後半に『スズキリー・オブ・ジャズ・ロック』という特集を8週くらい続けてやったんですけど、これがかたかなに売れたプログラムで、取っていたる本人のインタビューもちゃんと集めて取りたててですよ。そういう高層の特集をまた期間をかけてやってみたいですね。……そうだな、あとは僕の番組を聴いて、『なんとく他の番組より音がいいな、音質がいいな』ってCDより音がいい』って思っていたら嬉しいですね。」

RADIO

「自無人」が贈る、極上のオールディーズプログラム
『山下達郎のサンデー・ソングブック』
TOKYO FM 毎週日曜日 14:00~14:55

山下達郎が保有する膨大な数のレコード音源を、自身のレコードからランダムに選び「オムニバス」を編み出した。このほか、毎年、8月12日に年内のやりやをまとめた「忘れぬ瞬間音楽」大賞贈呈も大々的。2017年山下達郎の「最後の誕生日音楽」の放送も打ち付け55分間、放送開始20周年を記念した企画を同時行っていくので、どうぞお楽しみを。

MUSIC

通算50枚目を飾る感動的なバラード!
『REBORN』
発売中 ¥1,200+税



東野真直の傑作ドラマ『サキヤル』の音楽、今更僕主演歌劇となる本作。山下達郎自身、今まで隠した主題歌の中で、一つ、二を挙げて欲しいというリクエストの答えを返した。本作のテーマは、「再生機」。絶望的な問いを投げかけながら、映画を盛り込んでいる。

PROFILE

山下達郎
Tatsuro Yamashita

75年シブヤク・ギャング・メソッドとしてデビュー。76年のソロデビュー以降、「HIDE ON TIME」、「クスマス・イブ」など、日本のポップ文化に名を轟かす数々の傑作を生み出す。CMやライブ活動の中心で、アーティストとしての音楽活動も、幅広い音楽生活を行い、コンサートも毎年コンスタントに開催中。



